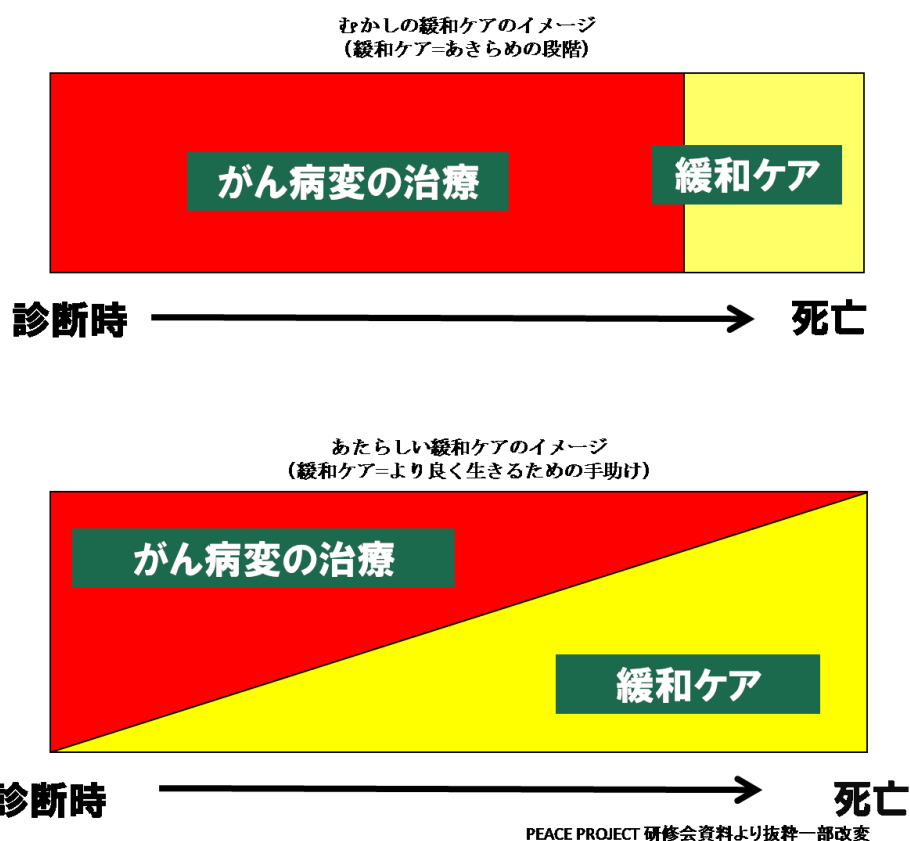


## 「診断されたときからの緩和ケア」の話

多くの方が、終末期医療やターミナルケア、といった言葉を連想されるのではないかと想像します。「もう治療がないから、そろそろ緩和ケアのお世話になる？」というあれです。私たちが提供する緩和ケアとは、2002年の世界保健機関(WHO)の定義に基づくものであり(当ホームページ:[緩和ケアについて参照](#))、すなわち「疾患の早期から」生活の質を改善することです。こうした考え方は比較的新しいもののようです。

当のWHOが12年前の1990年版では「治癒不能となった患者とその家族に対して行うケア」と定義していたわけですから、いまだに皆がそう思うのも無理ないのかもしれませんが。この緩和ケア、本来はがんだけでなく「生命を脅かす疾患」すべてが対象となります。病気の診断から治療に至る過程で感じる苦痛は人それぞれです。下の図は、緩和ケアがどのような時期に必要とされるのかについて示したものです。



今は図の下段のように、「患者さんが病気を知ったときから支援していく」という考え方が一般的となりました。でも、まだまだ現場の医療者や患者さんに浸透しておらず、実際に支援する体制の整備も道半ばです。「そちらの病棟に行ったらもうおしまいということでしょう」と言われてがっかりすることも多いです。病気と付き合う人生を、がんを治療する主治医だけで支えることはできません。悩みが発生したそのときから、将来を見据えて支度を

整えなくてはならないのです。そのために、私たちのチームがお役に立つことがあるかもしれません。次回からは、がん診療をめぐる誤解や問題点のあれこれを数回に分けてお話ししてゆきます。